

平成26年度スーパーグローバルハイスクール構想の概要

| | | | | | | | |
|------------|---|--|---|----|-----|---|-----|
| 指定期間 | ふりがな | じゅんてんこうとうがっこう | | | | ②所在都道府県 | 東京都 |
| 26～30 | ①学校名 | 学校法人順天学園 順天高等学校 | | | | | |
| ③対象学科名 | ④対象とする生徒数 | | | | | ⑤学校全体の規模 | |
| | 1年 | 2年 | 3年 | 4年 | 計 | 全日制 普通科 825名 *④は年次進行で、かつ対象とするクラスも順次拡大するため、指定5年目に全校生徒対象 | |
| 普通科 | 40 | 40 | 40 | — | 120 | | |
| ⑥研究開発構想名 | グローバル社会で主体的に活躍する人材育成のための研究開発 | | | | | | |
| ⑦研究開発の概要 | アジア・太平洋地域における様々なネットワークを活かして、グローバルな社会課題に対応する教育的支援プロジェクトの実践的研究を中心に、共同的なネットワーク、統合的なスクールワーク、創造的なフィールドワークによる探究学習を研究開発する。 | | | | | | |
| ⑧ 研究開発の内容等 | ⑧-1 全体 | <p>(1) 目的・目標</p> <p>本校の教育目標「英知をもって国際社会で活躍する人間を育成する」の下、グローバルな課題を海外の高校や大学などと連携して、共同的、統合的に探求し、創造的に解決しようとする探求学習の関係や方法、機会をこれまでの枠組みを超えて構築する。それらを通して、グローバル社会で主体的に活躍する資質の向上や人材育成をめざす。</p> <p>(2) 現状の分析と研究開発の仮説</p> <p>多くの国際教育活動プログラムや海外の高校、国内外の大学・NPOなどとの関係を保有しているが、これらが有機的に関連した共同的な学びにはなっていない。グローバルな社会課題解決には、多様な国際社会と言葉を交わし、多面的な視点を共有していく共同的作業が欠かせない。そこで、ネットワークによる共同的な探究学習を開発する。</p> <p>また、総合学習でのテーマ研究や学級のLHR・グループコミュニケーション、学校行事としての海外研修など、様々な探究的学習を展開しているが、これらが有機的に関連して、統合的な学びになっていない。そこで、スクールワークとして統合的に行う探究学習を開発し、学校全体としての教育成果や教育機能の向上を期したい。</p> <p>さらにまた、海外研修旅行における交流活動や探究活動も基本的に一過性の体験であり、将来のキャリアにおいてグローバル社会での活躍を志向するような、創造的な学びになっているとは言えない。そこで、海外の生徒と共同でグローバルな社会課題を実践的に解決しようとする、フィールドワークによる探究学習を開発する。</p> <p>(3) 成果の普及</p> <p>研究開発では極力主体的な探究活動をめざして、SGH対象生徒のコアとなるユニット（GLAP）を創設し、順次、全校に拡大していく。またSGHの成果を、国内外のアカデミックな大学との高大連携の拡大につなげていき、将来的には日本の高校生や大学生が国際社会貢献活動として取り組めるギャップターム・イヤーの基盤構築をめざして、国際系の各大学や国際的なNPO機関、国際的な企業などとの連携を図っていく。</p> | | | | | |
| | | ⑧-2 課題研究 | <p>(1) 課題研究内容</p> <p>グローバルな社会課題として、経済的格差による貧困問題等があるが、その根本的解決には一般に教育水準の向上が期待されていることを背景に「アジア・太平洋地域における教育的支援プロジェクトの実践的研究」として取り組む。具体的な研究テーマとしては、以下の様な事項が想定される。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・就学意識の向上改善に資する教育的支援活動 ・公衆衛生の改善啓発に関する教育的支援活動 ・自然災害や環境保全に対する教育的支援活動 <p>(2) 実施方法・検証評価</p> <p>課題研究の実施に当たって、海外連携校との共同の事前学習や、校内での総合的学習</p> | | | | |

| | | |
|---|--|--|
| | | <p>などを経て、英語生活圏であるフィリピンでの海外フィールドワークを想定している。そこで、課題研究を3段階の研究開発区分にしたがって重層的に実施して、その成果を検証評価する。</p> <p>1、ネットワークによる共同的な探究学習 海外の交流校と共同で、グローバルな社会課題に関する英語の資料教材を製作する。生徒自身が考えた視点や解決に向けた提案等を共有することが基本である。その際、格差問題等に対応する教育的支援プロジェクトの構想を描いていくことを重視する。 ネットワークを用いて生徒自身がそれらを創っていくプロセスがどのように構築されたか、共同作業によって得られた各種の資料教材などを、検証評価する。</p> <p>2、スクールワークによる統合的な探究学習 グローバルな社会課題に対する国際理解・国際協力・海外研修などの多面的なワークショップを、総合的学習の時間に、英語教材等も用いて統合的な探究学習として実施する。 連携関係機関の協力の下で行うワークショップを通して、実践的な社会貢献活動への意欲が高まっているかなど、ワークショップの実施者や生徒本人の意識調査、ワークシートの成果物などによって検証する。</p> <p>3、フィールドワークによる創造的な探究学習 グローバルな社会課題に対応するための、フィールドの状況理解、問題の構造の分析、課題に直面する当事者などとの関係づくりなど、広範な視点を踏まえて、問題解決に向けた創造的なアプローチを試みる。 海外でのボランティア活動と重なるフィールドワークでは、交流活動や社会貢献活動を行うこと自体が人間的成長などの意義を生み出す。それらは実施後の満足度調査などでも十分に期待できるが、さらに海外の生徒などと連携して活動ができたか、英語による教育支援活動はどのように行うことができたか、それらによって共同性や創造性を育むことができたかなどを、ヒアリングなどにより検証する。</p> <p>(3) 必要となる教育課程の特例等 特例の適用を予定していない。</p> |
| <p>⑧ -3 上 記 以 外</p> | | <p>(1) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価 英語によるグローバルな社会課題に関する資料教材の開発や、英語や日本語によるコミュニケーションスキルの向上、全教科における双方向授業やアクティブラーニングなどの教育手法による研究発表を推進する。</p> <p>(2) 課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等 特例の適用を予定していない。</p> <p>(3) グローバル・リーダー育成に関する環境整備，教育課程課外の実組内容・実施方法 帰国生徒の受入れを、高校で現在より50%増の75名程度に、外国人生徒の受入れを10名程度に増加させる。また帰国生相互の支援をする組織により、外国人留学生やギャップイヤーの英国人学生などと共に、校内のグローバルイベントを活性化させる。 初年度にSGHの対象となる英語系クラス（Eクラス）ではすでに、英語によるアカデミックなワークショップやプレゼンテーションを実施している。さらに5年後には全校生徒がSGH対象生徒になるが、学校全体の英語によるスピーチコンテストをディベート・プレゼンテーション型に転換してしていく。</p> |
| <p>⑨その他 特記事項</p> | | <p>特に無し</p> |